

子供の実態に関する研究を踏まえたがん教育

杉崎 弘周

新潟医療福祉大学 健康科学部 健康スポーツ学科

〈概要〉

がんは1981年から日本人の死因の第一位である。本稿は「子供の実態に関する研究を踏まえたがん教育」と題して、小学生のがんについての意識、小学生のがんについての知識、がん教育に対する保護者の態度、がん患者のイメージ、近親者にごがん経験者のいる子供、そして結びとして今後の展開への期待について述べる。

〈キーワード〉

児童 小学校 体育 授業

I. はじめに

がんは1981年から日本人の死因の第一位である。高齢化の影響を除くと、がん死亡率は低下しており、がん罹患率は上昇している。今後、近親者にごがん患者が増える可能性が高くなることから、子供にとっても身近な病気と言える。

文部科学省による「学校におけるがん教育の在り方について（報告）」¹⁾では、「がん教育は、健康教育の一環として、がんについての正しい理解と、がん患者や家族などがんと向き合う人々に対する共感的な理解を深めることを通して、自他の健康と命の大切さについて学び、共に生きる社会づくりに寄与する資質や能力の育成を図る教育である」とがん教育が定義された。また、がん教育の目標として①がんについて正しく理解することができるようにする、②健康と命の大切さについて主体的に考えることができるようにする、という二点と内容が示されている。がんという病気を正しく理解させることに留まらず、健康教育の一環として多くの可能性をもっている。

『学習指導要領（平成29年度告示）解説 体育編』（以下、「解説」とする）における保健の内容をみると、小学校では、喫煙の影響として「がん」があげられている。中学校では、生活習慣病などの予防において、「がんの予防」という内容が新設され、がんとは何か、がんの予防などと併せて健康診断やがん検診についても触れることになった。高等学校では、がんの要因として日本人に多い細菌やウイルスによる感染なども理解できるようにすること、高等学校の特徴である社会的な対策として、健康診断や

がん検診の普及、正しい情報の発信なども理解できるようにすることになる。さらに、がんの回復として治療法、生活の質の保つこと、緩和ケアにも触れることになっている。がん教育においても、系統的な指導が求められる²⁾。

がん教育の実践については、文部科学省が公開している教材、全国で展開されているがんの教育総合支援事業におけるモデル校の取組が参考になる。本稿では、がん教育を進める上で参考となる基礎的な研究の成果を紹介する。

II. 小学生のがんについての意識

国の約2200名の小学5年生を対象に、がんについての意識や知識についての調査研究が行われた³⁾。まず、「あなたは『がん』についてどのような印象を持っていますか」では「こわいと思う」が72.1%（男子64.7%、女子79.5%）であった。「どちらかといえばこわいと思う」を併せると88.2%（男子83.0%、女子93.4%）となり、小学生の8割以上がこわいという印象があることが分かった。なお、中学、高校と校種が進んでも、約8割はこわいという印象を持っていた。「あなたは将来、自分が『がん』になると思いますか」では、「わからない」が42.6%（男子40.7%、女子44.5%）、続いて「どちらとも言えない」が28.7%（男子26.2%、女子31.2%）である。自分ががんになると「思う」は、8.5%（男子11.0%、女子6.0%）であったのに対して、「思わない」は、19.6%（男子21.9%、女子17.3%）であった。多くの小学生ががんをこわいと回答していたが、自分ががんにかかると思っていたのは10%にも満たないとい

う結果から、「こわい」という印象が漠然としたものであることがうかがえる。

Ⅲ. 小学生のがんについての知識

学生に知っているがんをたずねたところ、肺がんが36.0%（男子36.6%、女子35.3%）、次いで、乳がんが35.8%（男子26.9%、女子44.7%）、続いて白血病が33.4%（男子32.1%、女子35.3%）という結果であった。特に、乳がん（男子26.9%、女子44.7%）と子宮がん（男子17.3%、女子28.3%）については、男女で非常に大きな差があった。このような実態にも注意してがん教育を計画しなければならない⁴⁾。

たばこと肺がんの関係から、肺がんを知っている児童が多かった可能性がある。また、乳がんや白血病については、芸能人の罹患、映画やドラマなどの登場人物の罹患などによって知ったのではないかと考えられる。この調査は、中高生にも行っており、海外における同様の調査結果と比較すると、日本の子供の方が肺がんを知っている割合が高く、乳がんを知っている割合がやや低くなっていた。

Ⅳ. がん教育に対する保護者の態度

がん教育の本格実施を前に、全国の小・中・高校生の保護者を対象として2018年に調査を行い、約2400名から回答を得た⁵⁾。学校でがん教育が実施されることを知っていた保護者はわずかに11%だった。ところが、約73%が実施に賛成と回答しており、反対としたのは1%に過ぎなかった（残り約26%はどちらともいえない）。しかも、がん教育に関する内容の全てについて、不必要とする保護者が少なく、70%以上が必要かやや必要としていた。全国の保護者ががん教育に対して概ね肯定的に受けとめていることから、学校におけるがん教育は積極的に推進していただきたいものである。ただし、教科書に記載があるとしても、十分な配慮をして実施することが求められる。

Ⅴ. がん患者のイメージ

私自身、がん患者会の方のお話を聞く機会があった。がん患者ということで、「たばこを吸っていたのですか？」と聞かれることが多いそうである。しかも、これはがん患者の方の共通の経験だという。実際に、がんの原因を小学生がどう考えているかという調査研究⁶⁾では、たばこが95.5%でトップであり、多くの小学生が、がんとたばこの関連を知っているという実態が示されている。

解説には、「喫煙を長い間続けるとがんや心臓病などの病気にかかりやすくなるなどの影響があることについても触れるようにする」という記述がある。喫煙はがんの原因の一つだが、「がんにかかった人＝たばこを吸っていた人」という短絡的な理解のみに陥らないように注意して指導する必要がある。がんについて学ぶことで、（がん患者への）偏見を助長する可能性もあることが研究で示唆されている⁷⁾。がん患者をゲストティーチャーとして招いたがん教育の授業と、そうでないがん教育の授業について、児童の認識を比較したところ、ゲストティーチャーを招いた授業よりも、ゲストティーチャーを招いていない授業の方が、「がん患者＝たばこ（やお酒）をやりすぎた人」というイメージが高まっていたという。一方で、がん患者をゲストティーチャーとして招いた授業では、たばこ（やお酒）はがんの原因であるが、がんになる必須条件ではないということが、全体にはないにしても、伝わったと考えられる。この研究から、ゲストティーチャーがいない場合であっても、たばこを吸うとがんになるという短絡的な理解に留まらず、たばこを避けることでがんのリスクを軽減させることができることを伝えていくことが求められている。教える側が、このようなことを踏まえ、指導の工夫をしていかなければならないだろう。

Ⅵ. 近親者にがん経験者のいる子供

親者（親や親戚など）ががんである子供は増えている。日本の小学生の約24%で近親者にがんの経験者がいると推計されている⁸⁾。

近親者にがん経験者がいる子供は、そうでない子供と比べて「がんはこわいと思う」「将来がんになると思う」という割合が高いことが明らかになった。また、「がんは予防できると思う」割合は低くなっており、「将来、がん検診を受けられるようになったら受けようと思う」という割合は高くなっていく。

さらなる分析で、近親者にがん経験者のいる子供のうち、がんについての理解度の高いグループは、「がんは予防できると思う」や「将来、がん検診を受けられるようになったら受けようと思う」という割合が高くなっていった。横断調査という研究の限界はあるが、がん教育によって、多くの子供ががんについて正しく理解することで、がん検診の受診意図が高まる可能性が示唆されているのである。また、中高生のがん検診の受診意図に関わる要因の研究で

は「家族とがんについて会話をしたことがあること」が関連することが分かっている。

Ⅶ. 今後の展開への期待

2016年から、がん教育総合支援事業が行われている。これまでに事業委託された自治体等の教育委員会では、地域の実情に応じたがん教育が推進されてきている。実践事例の蓄積はもちろん、独自教材の制作、教師用の手引、外部講師リストの整備などが行われている。これらの成果を活用し、がんについての最新の統計、本稿で紹介した児童生徒の実態に関する研究などを踏まえて、がん教育が展開されていくことを願っている。

本稿の初出は、杉崎弘周：フロントライン教育研究 子供の実態に関する研究を踏まえたがん教育，文部科学省編：初等教育資料 令和2年8月号，東洋館出版社，76-79，2019です。掲載された図表は割愛し、調査データの追加を行いました。転載をご快諾いただきました株式会社東洋館出版社ならびに文部科学省教育課程課／幼児教育課に心より御礼を申し上げます。

引用文献

- 1) 文部科学省：「がん教育」の在り方に関する検討会『学校におけるがん教育の在り方について（報告）』2015.
- 2) 杉崎弘周：がん教育って何？どう教えればいいのか？，体育科教育8月号30-31，大修館書店，2019.
- 3) 植田誠治，杉崎弘周，物部博文ほか：日本の児童生徒のがんについての意識の実態，学校保健研究，56：185-198，2014.
- 4) 植田誠治，物部博文，杉崎弘周：学校におけるがん教育の考え方・進め方，大修館書店，東京，2018.
- 5) 杉崎弘周：学校におけるがん教育学校におけるがん教育に対する保護者の態度，日本小児科学会雑誌，123（9）：1433-1435，2019.
- 6) 物部博文，植田誠治，杉崎弘周ほか：日本の児童生徒のがんの原因についての認識と情報源，学校保健研究56：262-270，2014.
- 7) Yako-Suketomo H, Katanoda K, Kawamura Y, et al. Children's Knowledge of Cancer Prevention and Perceptions of Cancer Patients: Comparison Before and After Cancer

Education with the Presence of Visiting Lecturer -Guided Class. Journal of Cancer Education 34:1059-1066, 2018.

- 8) Sugisaki K, Ueda S, Yako-Suketomo H, et al. Cancer Awareness and Understanding of Students in Japan: What Do Students Having Close Relatives with Cancer Think About the Disease? Journal of Cancer Education. 2019 doi:10.1007/s13187-019-01602-6, 2019.